

曼荼羅樓船亭 まんだらろうせんてい

浅草という近代以降の下から湧いた地において、それらを表現するための塔を設計する。深淵という深い文化によって、街は動きだす。劇的・詩的風景の一角に演劇家が現れ、笑いを取り、また演じていく。「隅田川・橋・旗」浅草の風景が組み合い、演を巻くように立ち上がる。



高野

隅田川の畔から笑いのトゲロをまく



旅行計画書

京都工芸繊維大学大学院 宮城 絢子

研究旅行のテーマ

・街におけるシンボル性と日常風景  
風景とは、非常につかみ所の無い存在であり、そのためしばしば風景を語ると建築としての弱さがでてしまう。しかし、果たしてそうなのか。人々の共通イメージとして心の中に描く事の出来る風景こそ、強い建築であり、我々はそうした風景を取り戻さねばならないような気がしている。次々と中身の無い、均質化しているとも言える。現代の風景に疑問を持っている。混沌・カオスの中に街の共通認識としての図式、もしくはイメージとなるものがあるのではないかと考えている。卒業設計では、浅草が作り上げてきた風景のひとつひとつを取り上げ、表象する街のシンボルとしての塔を作った。その塔の存在こそが、人々の心の中で強い風景となると考えたからだ。

訪問予定の外国の都市・街並み・建築物の内容

・肇興・(中国) ・バクタブル・カトマンドゥ(ネパール)  
どの都市も、様々な要素が詰まったカオス的場である。商店・塔・水辺・住宅・宗教・文化が集まり、密接に関係し合っている。風景の中にそびえる塔の存在。ここで、日常の風景を記述する手がかりを発見したい。各都市において個々の要素は有機的に関連しあい、総体としてこうした風景には力強さを持ち合わせる。

肇興 (中国)



決してきれいな川ではないが、子供達の遊び場になったり、人々の集う場所になっている。



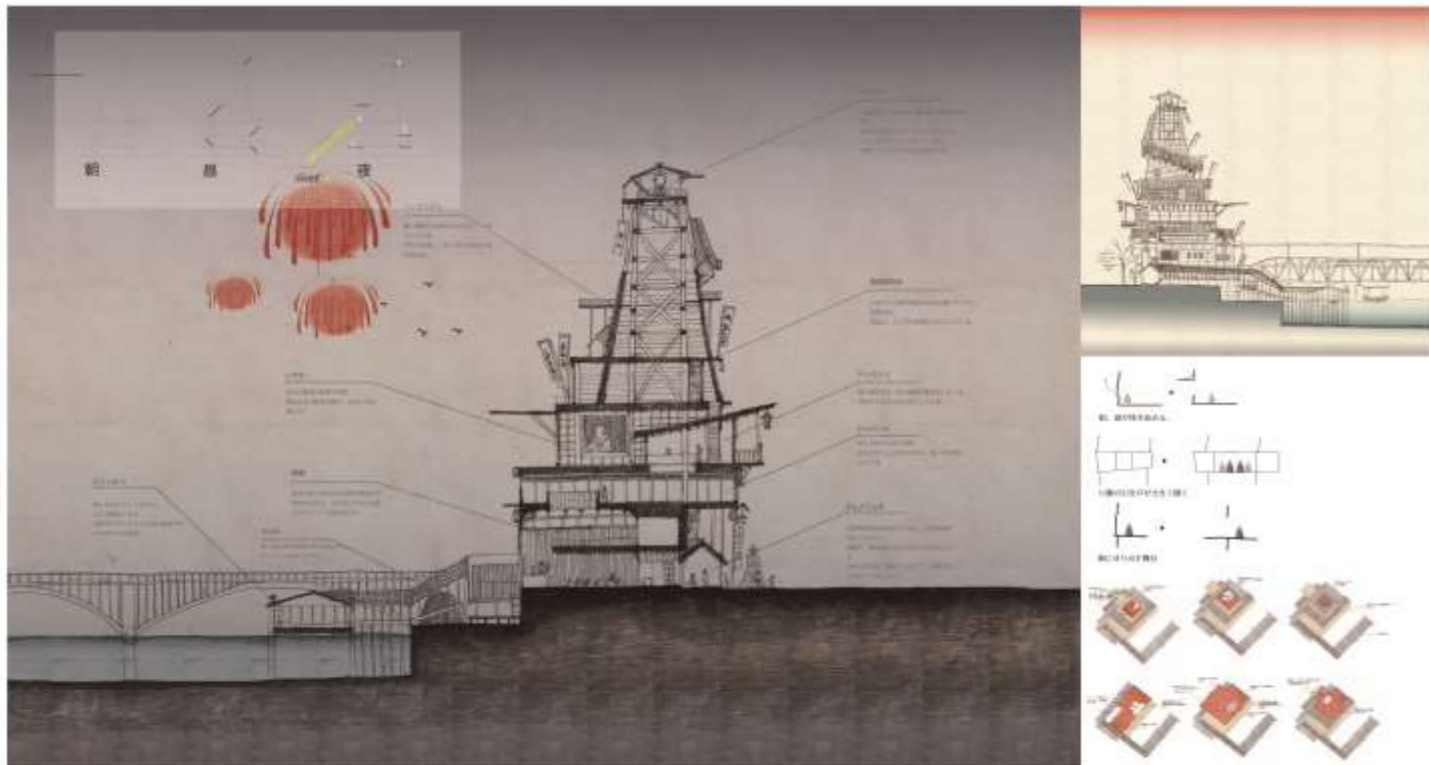
「集落全体の共同性を表出する塔があり、内部にはクラスターの共同性を表出する塔がある。」  
(肇興の教えー塚山司)

トン飯という民族の住む集落で、鼓樓を村の中に5つも有している。鼓樓、村門、祠堂、廟台、西雨橋、古い墓、棚田などが伝統的なトン族の村として保存されています。村は東西のメインストリートの両側に広がっている。北側には川が流れており、鼓樓と風雨橋はセットになっている。メインストリートの近くに鼓樓がある。



バクタブル カトマンドゥ 平遥

□研究方法  
風景の構成原理から見る外郭形成研究  
1. 街の構成図式  
塔・川・住宅・商店が、人々のなかでどのように生きているのかを探る。今回の旅行ではここをメインに調べ、最終的には風景の存在について記述したい。  
2. 現象サンプリング  
道空間で起こる現象のサンプリングを行なう。突如現れる<劇場型行為>、日頃から行なわれている現象を<日常型行為>と定義し、分類を行ない、街のキャラクターを命名していく。  
3. 建築要素の断片サンプリングによる各都市での比較検証  
日常的風景である看板やサインなど、外壁面において、カオスの状況から分類を行なう。



何もない白濁の中一人の演劇家が現れる。それを観るが見ている。そこに舞台における全てがあるのである。



隅田川に架かる橋、その上を歩くと... シンボルと塔の対峙... 塔の設計と周囲との関係... 塔の内部構造... 塔の外部構造... 塔の内部構造... 塔の外部構造... 塔の内部構造... 塔の外部構造...

卒業設計のタイトルと概要

曼荼羅樓船亭: 浅草と共に生きてきた失う事のできない演芸文化、そして変わりゆく街の中で、“笑い”という現象により、人間性を重視した都市の実現を目的とした棟を設計します。敷地は浅草駅周辺の隅田川の畔、真っ赤な吾妻橋、さくらの公園、目の前にはスカイツリーがそびえるこの地に落語の寄席をつくります。浅草に広がる演芸場と連携し、稽古場やコミュニティスペースを一般公開し、街の広告塔となる拠点をつくります。まず、浅草の断片プロットを行い、集められた歴史のエレメントを内部と対応させながら移植していき、落語のもつストーリー展開に合わせて平面を7階まで積層させます。全く性質の違うストーリーが、緩やかにつながる巨大なヴォイド(ゼロの舞台)によって一つのストーリーとして語られます。近代的ビルの隙間からひょっこりと飛び出た小さな太鼓場からこのストーリーは始まります。

研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)

都市の構成原理からみる外郭形成論—表層研究による都市の枠組み—





**01. 都市 / 自然環境と共生する建築**  
 淡路島の南にある小さなまち、福良。2013年夏、私はこの地に1ヶ月滞在し、人、街並、文化、風土—魅力溢れるこのまちが大好きになった。しかし福良は過疎高齢化によって伝統が薄れ活気が失われつつあり、訪れる観光客も福良の魅力に気付かない。そこで私が感じた福良の2つの魅力『祭り』『風景』が溢れ出すような建築を提案する。福良の町に呼応しながら新たな風景を作り出し、この建築をきっかけとして地域住人、観光客が交流することで福良の活性化へと繋げる。祭り、観光、人々を巻き込み、福良が踊り出す。

**02. 社会背景 / 地方活性化の課題**  
 地方自治体から人口減少、少子高齢化等により、多くの自治体で人口減少が懸念されている。人口減少による課題として、地方自治体の財政難、高齢者の生活の質の低下、地域コミュニティの弱体化などが挙げられる。

**03. プログラム / 地域の歴史と現代生活の課題**  
 地域の歴史を継承しながら、現代生活の課題を解決するための建築提案を行う。

**04. 構造 / 『祭り』『風景』の魅力を体験する空間**  
 祭りの雰囲気や風景の魅力を体験できる空間を創出する。

**05. 地域の歴史 / 祭りの歴史**  
 祭りの歴史を継承しながら、現代生活の課題を解決するための建築提案を行う。

**06. 地域の歴史 / 祭りの歴史**  
 祭りの歴史を継承しながら、現代生活の課題を解決するための建築提案を行う。

**08. 構造 / 動線と設備**

1. 祭りの空間を創出するための構造  
 2. 祭りの空間を創出するための構造  
 3. 祭りの空間を創出するための構造  
 4. 祭りの空間を創出するための構造  
 5. 祭りの空間を創出するための構造



**研究旅行のテーマ 自然環境と人間が共生する建築**

近年「地球環境問題」がクローズアップされるようになってきた。しかしながら、自然環境に対する関心の取り組みや意識は育まれているものの、地域や国といった人の生活単位において「地球環境への意識」はオープンな形で表れていないように感じている。

建築においても、今までであれば専ら美しい地域では「緑地の活用」を開発して対応し、美意識が高い地域では「地産の活用開発」を推進することによって対応していったが、近年起っている温暖化の動きは、単に「気温が高い」といったことではなく、海面上昇、局所的豪雨と干ばつ、人が飲み水として利用できる水資源の減少など、とても人の手によってどうにかできるような要素ではなくてきている。要するに、人目録で都市を駆使して環境問題にどう対応していくのか、早急に対応する必要がある。自然環境と共生する建築やライフスタイルをどのように実現していくのか、早急に対応する必要がある。早急に対応する必要がある。早急に対応する必要がある。

そこで、今まで自然環境と人間が共生してきた建築や都市を研究することで、これからの未来における自然との関わり方を探求する。その一環として北欧のフィンランドを取り上げたい。

フィンランドは、白夜と冬期のカーモス(冬期の太陽が昇らない日)の国ならではの特性として、光とあたたかみを求める傾向がそこに見出し、日本の生活と密接に結びついている。どのようにして光を取り込むか、あるいはその光によって空間をどのように美しく表現し、構築するか。フィンランドの建築は、その意識を高く、高品質な態度で形にしている。

また、フィンランドの美しい自然環境は、人々に自然の魅力を強く印象づけている。フィンランドでは自然は公共物という考え方が根付いており、誰でも自由にアクセスする権利を持つ。それが故に森や自然は大事に扱われなければならない。建築や都市に対しては同様で、個々の建築物であっても都市の一部であり国民が共有する財産であるという意識がある。一般市民の住みやすい、美しい街に対するコンセンサスや政策の開発・都市計画を推進する目的、健全な国家財政や福祉の充実などを基盤とした高い倫理観の元で成立しており、それが男女平等の意識の高さや労働環境の整備などへまでも繋がっている。

市場原理に基づいて再開発を繰り返してきた日本は、環境問題という環境問題を目の前にして、自然環境と共生する建築や暮らしを進めていかねばならない。自然環境と共生し続けてきたフィンランドから多くのことを学び取り、持続可能な日本の未来を考えていくきっかけとしていきたい。

**卒業設計のタイトルと概要**

**タイトル:** 福良が踊り出す  
**概要:** 淡路島の南にある小さなまち、福良。2013年夏、私はこの地に1ヶ月滞在し、人、街並、文化、風土—魅力溢れるこのまちが大好きになった。しかし福良は過疎高齢化によって伝統が薄れ活気が失われつつあり、訪れる観光客も福良の魅力に気付かない。そこで私が感じた福良の2つの魅力『祭り』『風景』が溢れ出すような建築を提案する。福良の町に呼応しながら新たな風景を作り出し、この建築をきっかけとして地域住人、観光客が交流することで福良の活性化へと繋げる。祭り、観光、人々を巻き込み、福良が踊り出す。

**研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)**

**テーマ:** 自然環境と共生する建築  
 気候変動という環境問題を目の前にして、これからは自然環境と共生する建築や暮らしを進めていかねばならないと考える。白夜とカーモスという自然環境と共生し続けてきたフィンランドから建築構成やライフスタイルを学び取り、持続可能な都市と建築の未来を考えていくきっかけとしていきたい。





境界のキヌア

丘陵に開発されたニュータウンと隣接する集落。20年前に新興戸建住宅地が開発されたことで、集落の土地は歯抜け状態になってしまった。そして今、地域全体に衰退の波が押し寄せようとしている。

郊外は衰退から逃れるのではなく、自然に還ることで場所として有効に扱うべきである。そこで、植栽し緑地に戻すだけでなく、この地域独自の縮退を考えたい。地域は居住地から農業を体験するための「テーマパーク」へとシフトしながら縮退していく。

ソフトとしての「キヌア栽培」とハードとしての「木組み」のシステムを地域に導入し、第1次産業の活性化を図り小さな経済圏を確立しながら、独自の縮退を図る。

01 架け橋

03 農園ハイブリッド

02 宿舎小屋

04 農園レストラン

**Introduction**

**地域の軌跡**

1. 1991年 丘陵にニュータウンが開発される。

2. 2011年 新興戸建住宅地が開発される。

3. 2018年 地域全体に衰退の波が押し寄せようとしている。

**Proposal**

丘陵と集落を分断する地形と、その間に生まれた隙間としての風景。

隙間の風景を軸とし、人と人、人と自然、人と自然との関係を再構築する。

隙間の風景を軸とし、人と人、人と自然、人と自然との関係を再構築する。

**市民農園**

**Urban System**

**SOFT - 縮退化する集落**

集落は衰退を受け入れ、市民農園を再構築する。時を越えて人口が減少したニュータウンも縮退していき、数世代を待たずには、現在の集落が自然に縮退していき、衰退の波が押し寄せようとしている。

**CHARD - 地域を復興する資源としての建築設計**

将来農業のための緑地を確保する。農園と集落を軸とし、人と人、人と自然、人と自然との関係を再構築する。これからの集落の縮退は、地域を復興することで、第一産業と集落の活性化を図る。

**全体計画**

01 架け橋

02 宿舎小屋

03 農園ハイブリッド

04 農園レストラン



研究旅行計画

(1) 研究旅行のテーマ

強い頃から日本三奇橋「橋」を見てきたため、橋というものに対して興味があった。橋は川・池・海を兼ね備えながら、都市の文脈を反映しながら、人々のふるまいを許容している。単なる川を渡るための構造物ではなく、地域の文化や歴史、景観を担う構造物である。

そんなことを考えながら、私が作り組んだ卒業制作においても、「架け橋」を設計した。鉄道や高層ビルのある地形が人々の移動を不安なものとしていたが、ただそれを解消するだけでなく、地域の象徴としても機能すべきと考えた。

しかし、現代の日本において「美学」の求められる価値は少ないように思われる。歴史的価値のあるものだけが保存され、コストパフォーマンスを優先して設計される歩道橋などの土俗的建造物が都市にはあふれている。

そこで海外都市の価値として現存する橋を見学したい。プロポーションや素材といった美的な考察と、人々のふるまいや地域性といった都市的な考察から、現代社会の橋のデザインや都市空間を見いだすことを目的とする。



(2) 訪問予定の外国の都市・街並み・建築物の内容

訪問予定の外国の都市はイタリア・フランスとする。特に木の都ヴェネツィアには多くの橋が存在し、「都市美的構成要素として貢献する」景観を体験することができるに違いない。

・リアルト橋（伊）は、橋上に商店街を有しており、プロポーションの趣しさとともに、都市における人々の活動の様子、ふるまいを観察することができる。

・ヴェッキオ橋（伊）はフィレンツェで最も古い橋であり、リアルト橋と同様に橋上の両側に商店を構えている。

・サン・ペネゼ橋（仏）はアヴィニョンのローヌ川を渡る。全長 100m を超え、アーチ構造である。

・ミヨウ橋（仏）は、フォスターとミシェル・ヴィルロジューにより設計された世界一高い橋で、フランス南部アヴェロンに存在する。ハイデッキ。



卒業設計のタイトルと概要

「境界のキヌア」  
丘陵に開発されたニュータウンと隣接する集落。20年前に新興戸建住宅地が開発されたことで、集落の土地は歯抜け状態になってしまった。そして今、地域全体に衰退の波が押し寄せようとしている。郊外は衰退から逃れるのではなく、自然に還ることで場所として有効に扱うべきである。そこで、植栽し緑地に戻すだけでなく、この地域独自の縮退を考えたい。地域は居住地から農業を体験するための「テーマパーク」へとシフトしながら縮退していく。ソフトとしての「キヌア栽培」とハードとしての「木組み」のシステムを地域に導入し、第1次産業の活性化を図り小さな経済圏を確立しながら、独自の縮退を図る。

研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)

「建築としての橋と都市のふるまい」イタリア・フランス

023





都市に住む

住宅の表出からみる街並み

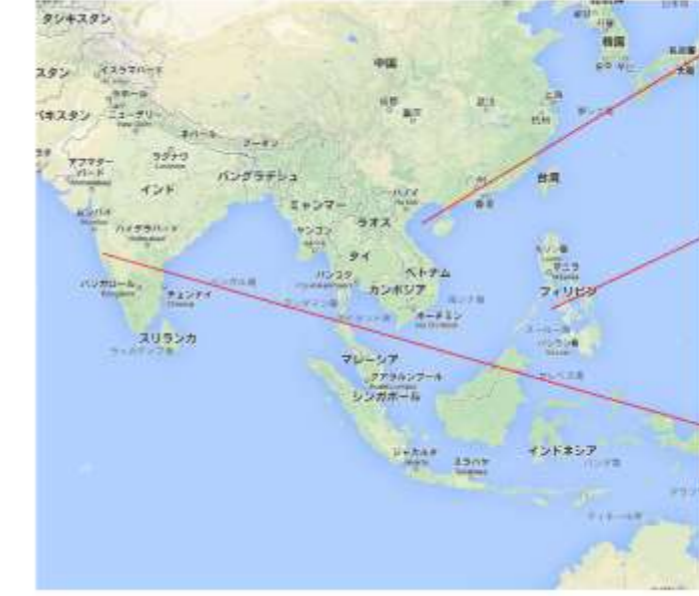
(0) 日本における集合住宅とは - 卒業設計を終えて -

敷地は中野区上野。閑静な住宅地において大規模な低層集合住宅の開発が行われている。用途地域によって高さ制限され、戸建住宅が建ち並んでいたところに、1.5haもの敷地が一体でマンションになるという計画がある。ゲーテッドコミュニティ化した住宅によって街に対する関心が薄れてしまうことで、街路と建築が切り離されてしまうことに対し、空想をグラデーション的に分断することを考えた。今後行われるであろう法曹地域の開発は日本の変容を大きく変えることになる。街路空間と建築の関係について今一度立ち戻らねば。現在でも路上歩行者および住居による建物の変容が豊かな街路を見ていることで、デザインソースを豊かにしたいと考えている。

(1) 住宅の表出からみる街並み - 研究旅行テーマ -

例えばベトナム・ハノイにある36通りには、開口が狭く、奥行きが長い住宅が連立している。開口が狭いため電線に接する部分が多く、住戸の機能が直線上に連続していることから内部の生活仕掛けははっきりしている。これにより、街路空間の活気が住宅内部にも取り込まれている。江戸時代の絵巻物では横切った路上での活動が、開発途上の街々においては観察することが出来るのではないかと考えている。これらの計画方法としては、開口の実績ならびに表出のスケッチと街路空間の変わり方のスケッチなどを考えている。また、建物増築しているものを観察することも有効であると考えられる。開発途上におけるマンションと、スラム的なセルフビルドの住まい方の比較も対象としたい。都市において高層的な街並みは作り出すことができるのだろうか。建築時の操作と居住による変容の様子を記録することで明らかにしたいと考えている。

(2) 訪問予定の外国の都市・街並み・建築物の内容



**ベトナム：ハノイ**  
旧市街36通りをはじめとした、狭い開口の住宅群は、夜路に表出する活動と内部に隠す部分を明確に分けている

**フィリピン：マニラ**  
高低差が大きいため、建築物に用いる素材が異なることや、街路に開放する程度が異なる。また、日本のマンションと比較することで、集合住宅の外部との関わり方の傾向を明らかにすることができる

**インド：ムンバイ**  
開発の進む平島先端部とそれ以外の地域では集合住宅のあり方も異なり、低層と高層による街並みの違いを表出から読み取ることが期待できる

知手と長手  
建物の軸から長手と知手を決定し、長手と知手の比率を調整することで、建物の長手と知手の比率を調整することができる

共有と専有  
建物の軸によって共有部と専有部の比率が定まり、共有部のサイズと専有部のサイズを調整することができる

公共と私有  
共有部によって空間にアクセシブルな空間を創出し、共有部のサイズと私有部のサイズを調整することができる

独立と連続  
建物の軸の連続性によって、建物の連続性を確保することができる

開放と閉鎖  
建物の軸の連続性によって、建物の開放性を確保することができる

変化と維持  
建物の軸の連続性によって、建物の変化を確保することができる

2015年  
2025年  
2035年  
2045年

卒業設計のタイトルと概要  
都市に住む 都心部における低層集合住宅の提案

研究旅行のテーマと訪問予定の国(都市)  
住宅の表出から見る街並み ベトナム(ハノイ)、インド(ムンバイ)、フィリピン(マニラ)